



自民党が反対 一時削除されたが...

日本禁煙友愛会など 15万人の署名

「たばこで死ぬ、だまされるな」。WHO世界保健機関が今年の世界禁煙デー(五月三十一日)で掲げているスローガンです。人気タレントやスポーツ選手を宣伝に起用するなどの消費拡大をはかっている会社から命を守るという警告です。日本でも、全体の喫煙率が下がると、若者・未成年、女性は上昇傾向、WHOに負けじと市民団体が各地で禁煙・喫煙防止を呼びかけています。

厚生省の「健康日本21」二計画は、「三〇一〇年までに未成年の喫煙をなくす」という目標とともに、全体喫煙率を十年で半減

「健康日本21」最終報告に復活・明記

「喫煙率10年で半減を」



集まった署名は1万人分を1冊にして提出しました



昨年完成した「禁煙会館」

未成年者の喫煙なくそう

市民団体がマンガ本にして訴え

たばこの歴史や健康被害のしくみ、喫煙抑制の世界の取り組みなどをわかりやすいマンガにして普及しているのは、NPO法人「子どもに無煙環境を」推進協議会。



「スモ一禁探偵団」をぜひ多くの人に広めたいと竹村さん

一の「コケラはスモ一禁探偵団」マンガ・竹中らん(こ)を発行しました。今年には「未成年者喫煙禁止法」が制定されて百周年。まず子どもたちに読んでもらいたいと思い、マンガにしました。細かいことはともかく、たばこには害があるのと、依存性があるので最初から吸わないことがとても大事なことをぜひわかってほしい」と同協議

生男子の喫煙経験率は三〇%、女子は一七%もあります。現在の喫煙者の三分の二は未成年から吸い始めているだけに、子ども時代にたばこを吸わないことが大切で、「会として喫煙そのものに反対する運動をしているわけではありませぬ。喫煙者の理解・協力も

得られると思います」と竹村さんは言います。同協議会の発足は一九八八年。子どもが家庭や学校などでおとなの煙を吸えようと設立されました。初代会長は、学生の母性保護を理由に学内禁煙を実施していた甲南女子大学学長の峰坂二夫(あじさかつお)さんでした。「子どもに無煙環境を」をテーマにポスターや標語などのコンクール実施、入選作品を使ったポスターの無料配布、禁煙電話の発刊などに取り組んできました。

県伊那市に本部を置く日本禁煙友愛会。四万六千人の会員、四十八支部をもつ国内最大の禁煙団体です。「このままでは数値目標が削除される」と、署名を集約し、すくなくして厚生省に手渡し陳情。運動は各地に広がり、署名は全国で十五万人になりました。こういって、三月三十一日に発表された最終報告書本文中には、「喫煙率半減」をスローガンに「大幅な喫煙率削減により」という文章が盛り込まれました。

抜群の行動力を発揮する役員のみならず、多くは元喫煙者。会長の小島義雄さん(こ)は、禁煙のきっかけとなった「事件」があります。三十年前、電車で向かいに座ったせんとくのおばあさんが、小島さんのたばこの煙で涙を流して苦しんだのです。「たばこを吸い続ける限り他人に迷惑をかける」と小島さんは禁煙を決意。ライターを金づちでつぶし、お守り代わりに持ち歩き、吸いたいのをがまんしました。

会の創始者で初代会長の小坂精蔵さんも、たばこ病で苦しんだ末に禁煙を決断。健康を回復し、その喜びを広げたいと発足させたのが会の始まりです。

二本柱の活動
会員拡大を力にした禁煙運動と社会奉仕が会の活動の二本柱。「子どもたちに禁煙ポスターを募集し、優秀作品を呼び求めたカレンダー」を毎年作成し、全会員と小・中学校に配布」など啓もう・宣伝も重視。今年昨年、WHOから「公衆衛生の向上に多大の貢献」したとメダルを贈った表彰状を贈られました。団体表彰は日本で初めてでした。

小島会長は「何をあいても大切なのは庶民の健康。世界の流れに沿った私たちの禁煙運動。これからも信念をもって堂々とやっていきたい」と語っていました。